



E-ism は、人々がより豊かに生きる営みの一つとして昆虫食を推薦します

現在の昆虫食の主な動き

1 昆虫食の偏見が低下

様々な料理法の開発が進み、各種メディアの昆虫食の取り上げ方も大きく変わってきた。

2 家畜化された昆虫“手乗り家畜^{注1}”が実用化

タイのコオロギ養殖を皮切りに、世界で養殖への関心が高まっている。

3 既存の農畜産業に昆虫を利用する技術を開発

イエバエやアメリカミズアブを養殖して余剰バイオマスを処理する技術が実用化され、ビール残渣、生ゴミ、畜産排泄物などを安価に処理し、虫体を飼料・食用化する企業が登場している。

4 昆虫食を学際的に研究できる環境の整備へ

2015年より世界初の食用・飼料としての昆虫学術誌が発刊された。昆虫食利用学などの学術分野の形成が進むと考えられる。



タイで養殖されてる食用コオロギ

10年後の昆虫食

1「害虫防除」から「害虫を利活用」する技術の確立へ

従来の「害虫」から、発想の転換により「益虫」と捉える大きなパラダイムシフトが生じる。

2 食用・肥料・飼料に適した養殖品種を開発

昆虫の家畜化（手乗り家畜）が進み、育種技術の進歩により、従来の家畜に匹敵する優良な品種が作出される。

3 国際的に昆虫の食利用を促進する体制の整備へ

国内外で食用昆虫の管理に関わる法律やガイドラインの整備が進む。

4 昆虫の文化的価値が見直され、プチ・ジビエ^{注2}活動が一般化

釣りやきのこ狩りのように、野外で昆虫を採って食べる遊び仕事（副次的生業）として昆虫食が一般化する。



トノサマバッタの養殖化イメージ



オオシロアリ

オオスズメバチ

50年後の昆虫食

1 昆虫食の社会実装が完了

農林畜産業から加工・サービス業まで、昆虫を活用した産業や昆虫食文化が根付いている。

2 昆虫バイオマスの利用から昆虫バイオシステムの利用へ

社会性昆虫の利用技術を開発し、森林を切り開くことなく利用する NWFP（非木材林産資源）として昆虫の高度利用技術が発展している。



クロオオアリ

注1 手乗り家畜

食用昆虫の家畜化は今まさに始まったばかり。従来の家畜よりずっと小さく、新しい家畜と言う意味で家畜化された食用昆虫を私たちは手乗り家畜と呼んでいます。

注2 プチ・ジビエ

フランス語で野生の野獣肉をジビエとすることを元に、野外で昆虫肉を得て、調理する過程まで含めた営みを私たちはプチ・ジビエと呼びます。